

# ことばの波止場

NINJAL Research Digest

vol.2  
2017.9



特集

## 日本語の個性①

方言研究・対照言語研究・  
日本語教育研究

コラム

日本語オノマトペの組み立て 小野正弘

研究者紹介  
著書紹介

相澤正夫 ポリー・ザトラウスキー 松井真雪



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

NINJAL

# プロジェクトリーダーが語る 日本語の個性

## 窪菌晴夫

KUBOZONO Haruo

くぼぞの はるお ● 理論・対照研究領域 教授。専門領域は言語学、日本語学、音声学、音韻論、危機方言。神戸大学大学院人文学研究科教授を経て、2010年4月から現職。

## 木部暢子

KIBE Nobuko

きべのぶこ ● 言語変異研究領域 教授。専門領域は日本語学、方言学、音声学、音韻論。鹿児島大学法文学部教授を経て、2010年4月から現職。

## 石黒圭

ISHIGURO Kei

いしぐろ けい ● 日本語教育研究領域 教授。専門領域は日本語学、日本語教育学。一橋大学国際教育センター・言語社会研究科教授、人間文化研究機構国立国語研究所准教授を経て、2015年12月から現職。

— まず、先生方がご担当されているプロジェクトの概要についてお話しさせていただきたいと思います。

**窪菌** 私のプロジェクトは「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」という大きなタイトルがついています。基本的なスタンスは「日本語を外から見る」というもので、他の世界の諸言語と比べて日本語がどのような特質を持っているのかという観点から、日本語がどのような言語かを明らかにしようとしています。また、その成果を海外に発信して、日本語の研究が世界の言語研究にどのように貢献できるかを模索したいと思っています。

**木部** 私のプロジェクトは、「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」です。いま、各地の方言がなくなりつつありますので、できるだけ方言をたくさん記録しています。録音をとることもありますし、次世代の人が分かるように文法を記述して、それから辞書を作るなどしています。

また、言語がなくならないように地域の人にもっと使ってもらおうという活性化の仕事もしています。記録に残るだけではなく、子どもたちが生きた言語を使うということが理想ですので、そういうふうになるように地域で活動しています。

**石黒** 私のところは、「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」です。日本語を勉強する人、多くはいわゆる外国の方ですけれども、そのような人たちが普段どんな日本語を使っているのか。日本語でも、勉強し始めたばかりの人とすごくたくさん勉強した人ではずいぶん違うでしょうし、漢字圏である例えば中国の方と非漢字圏の方とでは、学習の仕方も違います。また、それぞれ読む・書く・聞く・話すとあって、あるものが得意な人も、あるものが苦手な人もいます。いろんな環境で日本語を勉強している人たちの言語の運用能力を調べて、それを教育に役立てていこうというのが、私のプロジェクトの目的です。

— それぞれどのような背景があって、そのプロジェクトを始めようと思ったのでしょうか。

**窪菌** 日本語の研究は歴史もあって、特に音声の研究は、世界的に見ても非常にレベルが高いんです。ただ、他の諸言語と比較して日本語はどういう言語なのかという観点が、決定的に欠けていると思います。

その視点がないと、世界の言語研究に日本語がどのように貢献できるかも分からないわけです。そういう観点からプロジェクトを始めたのが2010年です。私が昨年からはじめた「プロソディー」班は、アクセントとイントネーションの研究が中心となりますが、「対照言語学」プロジェクトにはその他に「名詞修飾」「とりたて構造」「動詞の意味構造」という3つの班があり、普段はそれぞれが半ば独立性を保ちながら研究を進め、最終的にそれらを一同に集めるといふ形にしたいと考えています。

**木部** 日本だけではなく世界中でマイナーな言語が消滅に向かって進んでいます。このことは、今から40年ぐらいも前から言われてたんです。

日本では標準語（共通語）に対して方言がマイナー言語になるわけです。また、日本の中ではアイヌ語と琉球語が少し特別な位置にあって、これらはとても話し手が少なくなって、存在が危ぶまれている言語です。

そういった言語は、昔から話し手が少なくなっていってと言われてはいたのですが、2009年にユネスコが世界の消滅危機言語の地図を発表したことが直接のきっかけになって、もう少し組織的にそういう言語を守りましょう、記録しましょう、もう一回活性化しましょうという活動が行われるようになりました。

**石黒** もともと日本語教育という分野は、日本語を教える先生が中心となってけん引して学習者の言語を見てきた歴史があります。それはそれでももちろん素晴らしいことで、教師の視点は欠かせないと思いますが、やはり教師の目にはある種の限界もあります。

例えば、目の前の学習者の誤用が非常に印象的なので、ある現象を過度に一般化することがあります。これを考えるには、学習者が実際に話している生のデータを見ることが非常に重要です。量的に見ていくことで、学習者がどうしてそうした誤りをおかしてしまうのかを偏りなく知りたい。そういう生のデータをたくさん集めてくることが、国立国語研究所ならではの研究だと思います。

また、教師の視点と、もう一つ学習者の視点というのも明確に持って、車の両輪のようにして走らせていくと、より具体的なほんとうに学習者の日本語の習得に役に立つ研究になるんじゃないかなと思ってこのプロジェクトを始めました。

— ありがとうございます。それでは次に、実際に調査をされる際にどのようなフィールドで、どのような体験をされたか、お話を伺いたいと

思います。窪菌先生からお願いします。

**窪菌** 私は基本的に自分の故郷の鹿児島県、あるいは最近では宮崎のほうで、個人的な人脈を使ってインフォーマントを見つけてフィールド調査をしています。

たまたま調査したインフォーマントが自分の友だちの友だちだったり、昔の恩師の兄弟だったりして調査以外の話もできたりするのが面白いところです。また、調査の合間に、昔はこうだったといった、その村の生活をいろいろ教えてくれるので、言葉を考える上でもとても参考になりますね。どの村とどの村が交流があったなんていう話を聞くと、言葉の類似性と結びつけることができている面白いと思うときがありますね。

— 世界の言語と日本語を比較する研究をされていて、方言の点でも比較することはあるのでしょうか？

**窪菌** もちろんそうです。私にとっては標準語も、地域の方言っていうのも全く等価なので、標準語も一つの方言に過ぎないわけです。ところが地方の方言の中にはまだ調査が十分でないところ、あるいは調査がさ





れていてもその成果がまだ知られていないところが多いんです。ましてや海外には全然伝わっていません。ですから私が海外で発表するのはほとんどそういう地域の方言です。海外の人たちは、日本語イコール標準語と考えていますから、そんなに面白い体系や現象があるんですか、日本語はほんとに多様ですねという反応が返ってきます。

**木部** 私のプロジェクトには60人位メンバーがいて、毎年1、2回の合同調査をやるんです。今まで一番多かったのは40人を越えたときで、宮古島に行ったんです。40人のときは大変でした。一緒に集まるということは、まず言語や方言をどういうふうに取り、文法的に記述するかという共通理解をみんなで形成しておかなければいけないわけです。

この地域は初めてだっていう方もいると、お互いに「これどうやって書くの?」と聞き合います。「こんなこと言ったんだけど、これはどこで語と語が切れるのかな」とか話し合いをやるわけです。そうすることで「同じ釜の飯を食う」というコトバが

ほんとにぴったりくるような感覚になります。もちろん感覚的なものだけでなく、学問的にお互いに意見交換しています。それがとっても、自分にとってもみんなにとっても良かったなと思っています。

### — 次世代に伝える方法のお話をも少し詳しくお聞かせください。

**木部** 地域の言葉を子どもたちに伝えることが重要です。そのために今、言葉をどうやって「展示」しようかと考えているところです。方言だとか地域の言語は、そもそも文字で書くということを前提としてないので、基本は展示というと文字ではなくて、音声を展示するってことになるだろうと思います。以前、私はボタンを押したら方言が出てくるっていうシステムを作ったことがあるんですけども、それはわりと分かりやすい典型的な展示のパターンですね。

また、発音を文字で書いて、その文字をデフォルトにして、それが絵になっているというようなことをやっている人たちがいます。秋にそういう展示を一つ行う予定です。それは、子どもたち向けというのもありますが、ちょっと遊び心があって、動物の絵、虫の絵だったりするんですけど、そこに方言の名前が隠れているというような展示を今企画してます。

**石黒** 私は、去年は中国の地方都市のいくつか、ハルビンや青島、広州などに行って、現地の大学等<sup>チンダオ</sup>で学ぶ学生を対象に調査しました。中国では外国語として日本語を学んでいる環境ですので、家に帰れば基本的に中国語環境なわけです。教室でしか日本語に触れることがありません。

ですから私たちが調査に行っても、目をきらきら輝かせていろいろ学ば

うとする感じがとても強くて、日本のアンテナショップを出しに行くようなそういう感覚でした。それで、日本で教えるのとは全然違うなという感じでした。

また、日本語の相対的な位置を考えるきっかけにもなりました。例えば外国語学部の中では、いろんな言語を学んでる人が一つの建物の中にいるわけですが、中国での学習の特徴としては、音読して、朗読して、理解しようということなんでしょう。みんな、廊下に設置されている椅子に座って思い思いに声を出し、スペイン語を唱えている人の隣ではロシア語を唱えている人がいるという雰囲気でした。

こういう環境の中で学んで日本で留学に来ていたんだなってことが分かったことが、とても新鮮で面白かった体験でした。

### — それでは最後に他の二つのプロジェクトにどのような期待をしているか教えてください。

**窪田** 木部先生のプロジェクトも、石黒先生のも、あるいは日本語の研究が全体にそうなんですけども、とても優れた研究が多いと思うんです。過去の蓄積もあります。それをなんとか世界の言語の研究と同じ土俵にのせて発信してもらいたいというのが、日本語の研究全体に対する希望です。

木部先生のプロジェクトについては、日本語の多様性はすごいものだと思います。他の世界の諸言語と比べても、アクセントや文法の多様性は顕著です。そういうところをしっかりと世界の人たちに発信していけば、さらにすごい研究ができるんじゃないかと思います。

(石黒先生が関わる)日本語教育の人たちに対しては、日本語教育で終

わらないでほしいという思いがあります。英語教育や中国語教育などいろんな外国語教育があるわけですよね。それが日本国内でも世界各国でもなされているわけですから、世界の外国語教育と同じ土俵に立って、日本語教育から今度は第二言語習得などの研究に進んでいけば日本語教育の研究が世界の研究にもものすごく大きなインパクトを与えるんじゃないか、そういう期待を持っています。

**木部** プロジェクト間でもう少し連携が必要だと思っています。例えば日本語学習者の話すことと似たようなことが方言にもあるんです。それはおそらく同じルールを自分の頭の中で作って、そして言語を運用しているからだと思います。そういうデータを共有して、似たようなことが起きているとか、似てるけどちょっとここが違うとか、地域の人も学習者も、いろんな人たちが似たようなことをやっているとしたら、これは言語の一般的なルールにつながるんじゃないでしょうか。だからそういうことがもっとできればと思っています。

**窪園** 今の点は、第二言語習得と方言ですよね。もう一つ、第一言語習得というのがあって、赤ちゃんの日本語の特徴と方言に出てくる特徴も実によく似ています。赤ちゃんの言葉にも方言にも、簡単な規則でやろうという力や、発音を楽にしようという力が働いているのだと思います。第一言語教育と第二言語教育と方言なんて、あんまり関係ないなと思われがちですが、よく見たらとてもよく似ていますからね。

**石黒** 現在、国語研のコーパス開発センターでは、多数のコーパスを統一した方法で横断検索ができるよう



な形にしようとしています。

例えば学習者は「病院」と「美容院」の発音が苦手です。「びょういん」という発音がしにくいらしいんです。日本語学習者の言葉を文字化し、それを日本語学習者コーパスに収め、横断的に検索できるようにすると、隣同士のものとして出てきます。そうした発音の問題が生じたときに、日本語教育研究領域には音声の専門家はいないのでいろいろ教えていただく機会があればいいなと思います。

また、今おっしゃった、第一言語習得と方言についてですが、日本語学習者の言語というのは、日本語の一つのバリエーションなんですよ。それもさまざまな母語によるさまざまなバリエーションを持っているある種の方言のようなものです。ですから日本語の変化を先取りするとか、留学生の使う言語の中に、ある種共通語の持っているひずみみたいなものが反映されているような気がします。そうした点の連携ってというのは重要だなと私も言おうと思っていたところでした。

—— 一見それぞれ独立したプロジェクトに見えるものが、実はいろんなところで関わり合っているとよく分かりました。ありがとうございました。

聞き手●井伊菜穂子さん（一橋大学大学院生）



# 名詞修飾表現を考える

## プラシャント・パルデシ

Prashant PARDESHI

●教授／専門は言語学、言語類型論、対照言語学。神戸大学大学院人文学研究科講師、人間文化研究機構国立国語研究所准教授を経て、2011年4月から現職。



「名詞修飾表現」というのは日常的にあまり耳慣れない言葉だと思いますが、一体どのようなものでしょうか。「先生が生徒にインドの遊びを教えた」という具体例を通じて考えてみましょう。この文には、「先生」、「生徒」、「インドの遊び」という3つの名詞が含まれ、それぞれ「教える」という動詞（述語）の主語、間接目的語、直接目的語です。この文の名詞の位置を「教えた」という述語の右側に移動し、名詞に付いている格助詞（～が、～を、～に）を省略してみましょう。すると、以下の**1**～**3**の表現を作ることができます。

### 元の文：

「先生が生徒にインドの遊びを教えた」

### 主語である名詞を修飾する

**1** 「先生が生徒にインドの遊びを教えた」

### 間接目的語である名詞を修飾する

**2** 「先生が生徒にインドの遊びを教えた」

### 直接目的語である名詞を修飾する

**3** 「先生が生徒にインドの遊びを教えた」

（ は当該の名詞が元の文にあった位置を示します）

これらの表現は、一番右側にある「先生」、「生徒」、「インドの遊び」について詳しく述べるもの、言い換えれば、それぞれの名詞を「修飾」する表現です。このような、名詞についてその内容をより詳しく述べる表現を「名詞修飾表現」といいます。

これら**1**～**3**の日本語の名詞修飾表現（関係節とも呼ばれます）を皆さんにも馴染みの深い英語に翻訳すると以

下のようになります。

### 元の文：

‘The teacher introduced an Indian game to the students.’

### 主語である名詞を修飾する

**4** ‘the teacher who introduced an Indian game to the students’

### 間接目的語である名詞を修飾する

**5** ‘the students to whom the teacher introduced an Indian game’

### 直接目的語である名詞を修飾する

**6** ‘an Indian game which the teacher introduced to the students’

英語の名詞修飾表現は、日本語とは異なり、修飾される名詞は、左側の文頭に移動し、後続する関係代名詞節によって修飾されます。つまり、以下に図示するように、修飾される名詞は、日本語と英語とでは逆の方向に移動します。この移動の方向は、語順と深い関わりがあります。



N：名詞、Relp：関係代名詞

また、日本語では「太るお菓子」、「痩せる温泉」、「頭が良くなる音楽」、「一人でトイレに行けなくなる本」のような一見すると意味解釈が不思議な名詞修飾表現があります。お菓子が太るわけではないし、温泉が痩せるわけでも

ありません。また、音楽の頭がよくなることもあり得ないし、本がトイレに行くわけでもありません。つまり、これらの表現において、修飾されている名詞はその前の修飾句にある述語の主語または目的語ではありません。これらの表現を理解するためには、お菓子を「食べる人」が太る、温泉に「浸かる人」が痩せる、音楽を「聴く人」の頭がよくなる、本を「読む人」が一人でトイレに行けなくなるのように、表面上には現れない「 」内の情報を文脈からくみ取る（推論する）必要があります。これらの表現は、英語では日本語のようにコンパクトに表現できず、より長い説明的な言い換えが必要になります。例えば、「太るお菓子」は‘candy (which is) such that one gains weight by eating it’のように日本語では表現しない部分（「食べる人」）もはっきりと表現しないとイケません。また、「痩せる温泉」は‘a spa (which is) such that one loses weight by soaking in it’のように日本語では表現しない部分（「浸かる人」）もはっきりと表現しなければなりません。

日本語の名詞修飾表現研究は長い伝統と優れた成果の蓄積があります。本プロジェクトは、これらの先行研究の知見を援用し、日本語と世界諸言語の名詞修飾表現とを比較対照し、日本語が他の言語と似ているところ（類似点・普遍性）および異なっているところ（相違点・個性・多様性）を明らかにすることを目的としています。また、諸言語間の類似点や相違点を地図上で表し、ウェブで公開する予定です（<http://crosslinguistic-studies.ninjal.ac.jp/noun/>）。

# 方言を残すために

原田走一郎

HARADA Soichiro

はらだ そういちろう ●特任助教／専門は方言学、記述言語学。大阪大学大学院修了、博士（文学）。2016年4月から現職。



「方言」とひとくちに言っても、極めて多様で、それぞれに個性があります。まずは、方言のおもしろい表現を紹介しましょう。上の写真は宮崎県東臼杵郡椎葉村の風景です。急峻な地形を利用して生活が営まれていることがよくわかります。

ここ、椎葉の方言の、農作業をする際の場所をあらわす表現に「かまで」「かまさき」というものがあります。聞くと、「かまで」は右、「かまさき」は左をあらわす、とのこと。右手で鎌をもって作業する場合、「鎌を持つ手のほう」と「先のほう」、と教えていただきました。ほうほう、じゃあ椎葉のことばで「右」は「かまで」、「左」は「かまさき」というのか、と思ったのですが、どうやらそうではないようです。これらの「かまで」「かまさき」という語は、かならず“斜面に向かって”右か左を言うそうです。標準日本語の「右」「左」はどこに向いても使えますが、「かまで」「かまさき」はそうではないのです。つまり、椎葉方言のこれらの表現は、方言が使われている土地の地形を基準にした場所のあらわしかただと言えます。

このように、同じ国内で話されていることばであっても、その表現の方法

が根本的に異なる場合があります。それは、土地土地の生活を反映する形で方言が発達した部分があるためだと思われます。

このようにそれぞれ個性を持つ方言ですが、現在、多様性が失われつつあります。理由は、たとえば高齢化、地域社会の変貌、災害、

などいろいろです。このような状況ですので、方言研究者はできる限り多くの方言の記録を作成しようとしています。しかし、方言研究者の数よりも、姿を消す方言の数のほうが多いのが実情です。そこで、「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクト（通称「危機言語・方言」プロジェクト）では、方言の記録を作成する一方で、方言研究者の育成にも力を入れています。

「危機言語・方言」プロジェクトでは、おもに2つの方法で若手研究者の育成に取り組んでいます。1つ目は、地域の大学と協力してフィールドワーク実習を行うことです。昨年は島根大学と協力し、隠岐の島で調査を行いました。この調査には、島根大学の学生に加えて、全国の大学から公募した大学院生も参加しました。フィールドワーク初体験の学生も多かったため、事前研修を行いました。事前研修は、隠岐の島方言の概要、録音の方法、自然な方言の記録とは、など、実践的なものから理念的なものまで、今後方言研究にかかわる際の基礎となるような内容のものでした。



島根大学での事前研修の様子

そして、隠岐の島では実際に若手研究者や学生が調査を行いました。このように現場を若手に経験させることが若手育成のために必要不可欠であると、本プロジェクトでは考えています。今年、2017年は愛知県立大学と協力して、愛知県一宮市でフィールドワーク実習を行う予定です。

もう1つの若手研究者育成の軸は、各地の方言の記録作成のために若手を派遣することです。現在、40地点ほどで本プロジェクトのメンバーが活動していますが、その半数ほどが若手研究者です。その土地に通ってじっくりと方言を観察し、着実にその方言の記録を作成できる若手人材の育成を本プロジェクトでは目指しています。

このように、全国各地で「危機言語・方言」プロジェクトのメンバーが活動をしています。次にお邪魔するのはあなたがお住まいの地域かもしれません。



隠岐の島で調査をする若手研究者と学生

# 外国人が使う日本語



## 野田尚史

NODA Hisashi

のだ ひさし ● 教授 / 専門は日本語学・日本語教育学。  
大阪外国語大学大学院修了、博士（言語学）。2012年  
から現職。2006年に日本語教育学会奨励賞を受賞し  
た。

日本語は日本人だけのものではありません。世界中のたくさんの人が日本語を勉強したり、仕事で使ったりしています。

つい最近のことですが、ドイツの列車でたまたま会ったピアノの先生は日本語を勉強していて、日本にも毎年1回来ているということでした。その人は日本語では簡単なことしか話せませんが、こんな日本語のホームページも作っています。



外国の人の日本語を聞くと、「何か変だ」と思うこともあるでしょう。ですが、そういう日本語を分析すると、「そう言いたくなるのも無理はない」と思える理由があることが多いです。

たとえば、外国の人が「おいしいでした」という言い方をすることがあります。鹿児島の人のようにそういう言い方をする日本人もいますが、「おいしかったです」のほうが普通だと思う人が多いでしょう。

でも、「おいしいでした」と言いたくなるにはわけがあります。「おいしいでした」は、**1**のように、形容詞「おいしい」に丁寧さを表す「です」が付き、さらに過去を表す「た」が付いた形です。

### 1 おいしい でした

【形容詞】 【丁寧】 【過去】

「おいしかったです」はどうでしょうか。**2**のように、形容詞「おいしい」に過去を表す「た」が付き、さらに丁寧さを表す「です」が付いた形です。

### 2 おいしかったです

【形容詞】 【過去】 【丁寧】

**1**と**2**では丁寧さを表す「です」と過去を表す「た」の語順が違います。

では、形容詞ではなく動詞のときはどうでしょうか。「行きました」であれば、**3**のように、動詞「行く」に丁寧さを表す「ます」が付き、さらに過去を表す「た」が付いた形になるのが普通です。

### 3 行きました

【動詞】 【丁寧】 【過去】

名詞のときはどうでしょうか。「雨でした」であれば、**4**のように、名詞「雨」に丁寧さを表す「です」が付き、さらに過去を表す「た」が付いた形になるのが普通です。

### 4 雨 でした

【名詞】 【丁寧】 【過去】

ということは、動詞や名詞の場合は、丁寧さを表す「ます」「です」が先に来て、その後に過去を表す「た」が来る語順になります。

動詞や名詞がその語順であれば、形容詞も同じ語順にしたいくなります。そうです。それが「おいしいでした」という形です。

というふうに考えれば、外国の人が「おいしかったです」ではなく「おいしいでした」を使うのも無理はないということになります。

外国の人は、日本語を聞いたり読んだりしたときに「おかしな」解釈をす

ることがあります。

たとえば、**5**を読んだ場合です。

### 5 パスタはトマトのパスタを注文。無難で○

この文章は、グルメサイトに載っているレストランのクチコミの一部です。「無難で○」は、「トマトパスタは悪くない。よい。」という意味だと解釈するのが普通でしょう。

ですが、これを読んだドイツの人は、「トマトパスタは作るのが難しい。評価はゼロ点」という意味だと解釈しました。

どうしてそう解釈したか、わかりますか？「無難」は「難しく無い（むずかしくない）」の意味だと考え、「○」は数字のゼロだと思ったのです。

「無難」は「難点がない」という意味ですが、「難しく無い」と解釈したくなるのもわかります。

「○」は「よい」という意味で世界共通だと思うかもしれませんが、そんなことはありません。欧米などでは、「よい」という意味で、むしろ「×」を使います。「よい」とか「当てはまる」という意味でチェックマーク「✓」が使われていましたが、「✓」はタイプライターのキーにはなかったため、代わりにエックス「x」を使ったのが続いているのでしょう。

外国の人が使う日本語も、方言や昔の日本語と同じく日本語の一種です。そうした日本語を分析すれば、当たり前だと思っている「普通の」日本語にも実は不思議なことがたくさん潜んでいることが見えてきます。そうした「不思議」を明らかにしていきたいと思えます。



1回30分のミニ講義。今年、影山所長が登場！講義の動画はウェブで公開予定です。



「上下」というけど「下上」といわないのはなぜ？カードを使って複合語の謎に迫ります。



もう一つは原田特任助教による「ん!？」(共同企画:青井特任助教)。「ん」の音を手がかりに、日本語、英語、多良間島(沖縄県)のことばまで!



毎年恒例、辞書を楽しみ尽くすコーナー。国語辞典の基本、漢字辞典の楽しみ方、カルタ展示などバラエティ豊か!



辞書にあまり触れたことのない子ども、先生が丁寧に教えてくれるので安心です。



「どきどき」「遊ぶ」などのオリジナル語釈(説明文)を作るコーナーも。みんなに見せるのに少し「どきどき」?

# にほんご☆スタンプラリークイズ

説明するのが難しい「文法」という概念。ならば体験してもらいましょう!カードと紐を使った力作です!!



大人気のクイズコーナー。問題用紙を手に、先生からヒントをもらって解いていきます。問題のジャンルは多種多様。



国語研の夏祭り!?

## ニホンゴ探検2017

1年に1日だけ、国語研の研究員数が何倍にもなる日があります。それは、一般公開イベント「ニホンゴ探検2017—1日研究員になろう!」の日。研究所が一番にぎやかになる、国語研の夏祭りとも言える日なのです。今年は7月15日(土)に開催。過去最高の354人の方が、1日研究員になってくれました。

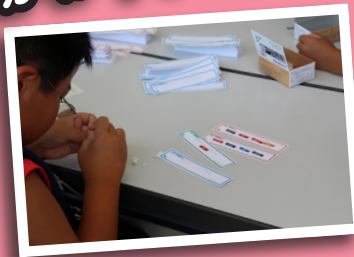


全問正解すれば、国語研グッズをプレゼント!国語研えんぴつで学校のテストに臨む子もいるとかいないとか。



## 日本語かかりうけゲーム

「いとこがポチにえさをあげた」……「いとこ」は「ポチに」に係る?係らない?(たぶん)ここでしか体験できない、係受けを題材にしたゲームです。



しおり作りコーナーも。係受け構造に合うように文節シールを貼ります。シールの組み合わせ次第で「オニが」「わたしを」「食べる」のような怖い文も。



今年も立川市歴史民俗資料館が展覧してくれました。今回のテーマは「多摩川の鮎漁」。郷土の歴史や自然にも触れられるお得な「ニホンゴ探検」です。

## れきみんワークショップ

# 日本語

## オノマトペの

## 組み立て

明治大学文学部  
教授

小野正弘

ONO Masahiro

### 「オノマトペ」とは？

最近、「オノマトペ」という言葉を耳にしたことがあるでしょうか？ あまり気がつかなかったなあ、というひと、「はらはら（する）」とか「がつつり（食べる）」というような言いかたは聞いたことがあると思います。「はらはら」や「がつつり」、また、「ワンワン」「ニャアニャア」などという言葉は、従来、「擬音語」「擬態語」と呼ばれてきたものです。つまり、「オノマトペ」とは、擬音語と擬態語をまとめていう言葉なのです。

下の表は、国立国語研究所の「日本語研究・日本語教育文献データベース」を用いて数えたものなのですが、研究論文の題名に「オノマトペ」を用いるか、「擬音語・擬態語・擬声語」を用いるかの推移が見てとれます。

まずその前に、オノマトペに関する研究論文の本数が、1980年代ごろからググッと伸びてきていることが分かります。つまり、研究する対象としてのオノマトペの面白さが理解されてきたと言っていいでしょう。1950年代は、オノマトペの研究自体が少なく、また、「オノマトペ」を論文題名に持つものも見当たりません。

表1 研究論文題名における「オノマトペ」「擬音語・擬態語・擬声語」

	「オノマトペ」系	「擬音語・擬声語・擬態語」系
1950年代	0	8
1960	11(うち小嶋10)	21
1970	13(うち小嶋4)	41
1980	21	99(オ併記2)
1990	77	92(オ併記1)
2000	172	84(オ併記3)
2010	110(2016まで)	34(オ併記1)

しかし、1960年代になると、急に11本の「オノマトペ」論文が現われます。しかし、このうちの10本は、ある特定のひと、すなわち、小嶋孝三郎さんというかたが書いたものなのです。小嶋さんというかたは、当時、立命館高校の先生をされていて、盛んに、近代文学を対象にして、そこに用いられたオノマトペについて、「オノマトペ」という用語を前面に出して、論文を書いていたのです。しかし、当時としては全体として「擬音語・擬態語・擬声語」系のものが多く、それは、1990年代まで続きます。ところが、2000年代からは、「オノマトペ」系と「擬音語・擬態語・擬声語」系が逆転、現在に至ります。小嶋さんは、研究の道半ばにして、惜しくも事故で亡くなられたと聞いています。現在の「オノマトペ」という用語の興隆を目にしたら、なんとおっしゃるかと思うと残念でなりません。

### オノマトペの加工と展開

今、オノマトペについて関心を持っていることから、オノマトペがその基本要素から、どのようにして、われわれが実際目にするかたちへと形成されるのかという問題です。オノマトペの形態の整理というと、従来は、たとえば、2拍（2文字）のオノマトペだと、「ABAB」型や「AっBり」型のように、出来上がったかたちでまとめられ、それぞれがどれぐらいの数量的勢力を持っているのかというように説明されることが多かったように思います。もちろん、それでも整理のしかたとしては立派なのですが、これだと、たとえば同じ基本要素 {ばた} から、一方で「ばたばた」、また一方で「ばったり」が形成されるといった事象がうまく関連付けられないといううらみがあります。そこで、

#### 従来の整理

A B A B …20例

A っ B り …15例

A B っ (と) …10例

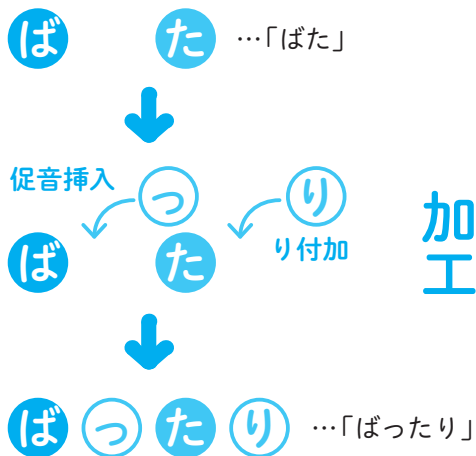
⋮

それぞれのパターンの総数は分かるが、たとえば、「ぐたぐた」「ぐったり」「ぐたっ」が共通にふくまれているのかが分からない。

現在、どのように考えているかという、あるオノマトペの基本要素に、まず加工が施され（施されない場合もあります）、そののちさらに展開され、最終的には文のなかで運用される要素を付加される、という動線を想定しています。

加工には、挿入と付加があり、挿入要素には、促音・撥音・長音が考えられ、付加要素には、促音・撥音・長音・「り」があります。さらに、挿入と加工の組み合わせが、促音挿入／り付加・撥音挿入／り付加・促音挿入／撥音付加などもあります。さきの基本要素{ばた}で考えると、ここから、「ばった」「ばたっ」「ばたん」「ばたー」「ばたり」「ばったり」「ばったん」などというように加工されるわけです。ちなみに、{ばた}は、「ばんた」「ばーた」「ばんたり」などという形は生み出さないようです。これは、基本要素ごとに特性があって、その追求は今後の課題として残っています。

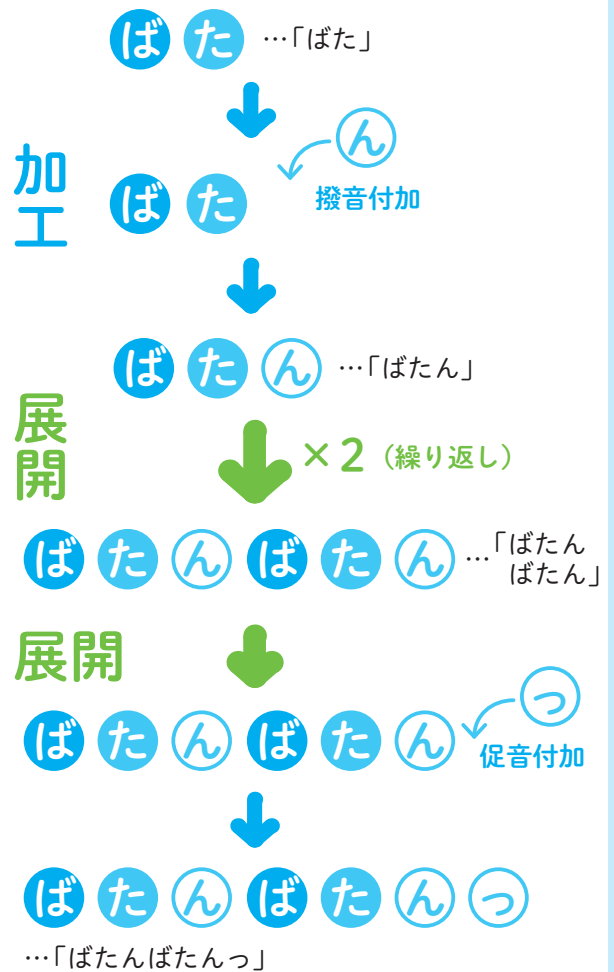
### 「加工」の例



加工された要素は、さらに展開されますが、展開の代表選手は、繰り返しです。×2のタイプが一般的です。{ばた}で考えると、[加工：なし] + [展開：×2]が「ばたばた」です。さらに、たとえば宮澤賢治の童話などでは、×3、×4も多くあり、なんと×6まで観察されます。{ばた}は、上記の加工済みのものからだと、さらに「ばったばった」「ばたんばたん」「ばたりばたり」「ばったんばったん」なども可能のようです。つまり、{ばた} → [加工：促音挿入] + [展開：×2]が「ばったばった」です。なにか算数のようですね。「ばたんばたんっ」 = {ばた} → [加工：撥音付加] + [展開：×2／促音付加]、みたいに。

これまでですと、繰り返しは、上記の加工とレベル的にあまり区別されていなかったように思われますが、

### 「展開」の例



基本要素が加工されたものも繰り返されるということと考え合わせると、レベルの差がある（つまり、展開のほうに属する）と考えたほうがよさそうです。また、上の計算式(?)にもあるように、また、「ばたばたっ」「ばたばたん」「ばたばたり」のような形を考えると、展開のほうにも、促音付加・撥音付加・り付加を入れておいたほうがよいように思います。逆に言うと、促音付加・撥音付加・り付加は、加工レベルのものと展開レベルのものがあるということになります。

このように、基本要素からの加工と展開によって、オノマトペが組織的に組み立てられていくことによって、一方では、さまざまなすがたのオノマトペとして増殖し、また一方では、細やかな意味差を形づくっていくわけです。



おの まさひろ ● 東北大学大学院文学研究科  
所定単位取得中退(文学修士)。鶴見大学専任  
講師・助教授・教授を経て、2001年より現  
職。日本語学会評議員、日本近代語研究会運  
営委員。専門分野は日本語の史的研究(語  
彙・意味・文字)



## 研究者紹介 004

# 相澤正夫

言語変化研究領域 教授

言葉をネタに語り合うのが  
何よりも好きで  
何時間でもしゃべれるんです

あいざわ まさお ● 1953年新潟県出身。国立国語研究所には1984年から在籍。2009年～2013年副所長。日本語が変化していく様子を分析し続けている。近著に、戦前の演説などを言語学的に解明した『SP盤演説レコードがひらく日本語研究』（共編、笠間書院 2016）。『例解新国語辞典』（三省堂）の編集にも関わっている。

### — 現在、興味を持っていることは？

ここ5、6年の間は「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」をテーマにしてやってきました。

現代語でも動態（＝動き）がありますよね。例えば戦後を一つの現代語というふうに見ると、わずか70年位の間にどんな変化があるのかといったことに一番興味があります。最近では国語研のプロジェクトとしてSP盤レコードの演説などを収めた資料を使い、似た関心を持った人を集めて、共同研究を行いました。私は、特に鼻濁音を対象に音声の研究をしました。

SP盤レコードの録音時期は20世紀の前半で、そのときその有名な人達は皆高齢ですが、生まれたのは幕末から明治初期です。その観点から見ると、これはものすごく貴重ですよ。一番早いのは大隈重信の1838年だったと思いますが、この年は、明治維新から考えても相当前です。その人の声が今音声として確認できる。この音声、プロジェクトを組んで皆で寄ってたかってつつこう、というところが国語研ならではの感じがします。

### — ことばの「動態」に興味を持ったきっかけは？

言語学を専攻していた大学の3年生のころです。柴田武先生（方言研究の第一人者）にフィールドワークに連れて行ってもらったんです。行先は岩手県の雫石や盛岡で、10日間ぐらいの期間です。性別は統一したほうがいいというので、毎日あちこちおじいちゃんを訪ねていき、調査票にそって音声も語彙も文法もみんな聞いてきて、つまり、それぞれの地点を皆で分担して

回って言語地図にするわけです。

ただことばの違いの分布をみて線を引き終わりというのではなく、「ここここにはこの表現があって、真ん中にこの表現があるから、きっと古いのはその両サイドに違いない」という、いわゆる言語地理学に入門したんです。ああ、そうか、「今」を調べても動きが推定できるんだなっていうね。

「今」にもいろいろあって、その中に動きの反映が読み取れます。同じ現代に生きてる日本人でも、言葉は少しずつ違ってきます。例えば、ある言いかたを年齢層別に調べて、片方から片方に向かって減ってるとか増えてるとかっていうのが分かれば、そこからすぐに変化していると断定するのは簡単ではありませんが、いろいろな条件を考えながら変化の推定はできます。

だから今から考えてみれば、柴田先生のもとで体験したことが一番自分の性に合ってたと思いますね。

### — 以前は、「インフラ」を「社会基盤」と言い換えるような外来語の言い換えですとか、病院の言葉の言い換えにも関わっていらっしゃいましたね。

21世紀になるころ、震源地は小泉純一郎首相だったんだけど、当時の文部科学大臣が、これは独立行政法人として国語研がやるというテーマだからと降りてきた仕事です。

「分かりやすい日本語」にするというだけならよかったんですけど、「美しい日本語」にしてほしいという指示がありました。これはすごく厄介で、美しさは個人の審美的な判断の問題だから、公の場所であり議論しても仕方のないことかもしれません。そのときは、

「きちんと伝える」という機能本位でいきましょっていうことを強く主張して、それで通したんです。

例えば、「インフォームドコンセント」のような言葉が、何の説明もなく出てくるようなことはあんまりなくなってきた気がします。この仕事は自分が好きで、というよりも指示を受けて行った仕事ですが、自分たちの研究手法が役に立つのであれば、それを応用してみるということで、社会に繋がってるなという実感が持てます。

### — 研究を長く続ける秘訣を。

穴を掘るときに、井戸って同じ幅でぐーっと掘っていきますよね。これが一番効率的に深く掘る方法ですよ。専門家の典型的なイメージはこれだと思うんだけど、私はこれができないんです。真ん中は一応決めるんだけどどうしてもその周りも気になって掘ってしまう。結果的に掘れた穴は浅いわけです。浅いんだけど中心はあるから、穴の形はロウト（＝じょうご）のようなイメージです。

ただ、間口を広げれば、ロウト状にしてもそれなりの深さが出るわけですよ。間口が広がればもっと深くなるような。つまり角度が一定ならどんどん深くなりますよね。研究においては、それを自分で無意識のうちに狙ってきたのかなっていう気がします。

井戸の周りに雑草が生えていけばそれも取りたいみたいな、そういうイメージですね。だからそんなことをやってるうちにいい歳になりましたが、それなりにそれが楽しくて仕方がなかったんだと思います。

# ポリリー・ザトラウスキー

共同研究員・ミネソタ大学 言語学研究所 教授  
お茶の水女子大学研究協力員・早稲田大学訪問学者

食べている時の会話には  
言語の様々な現象が見えてきて  
本当に面白い

Polly Szatrowski ●1985年にコーネル大学で言語学博士、1991年に筑波大学で文学博士。『日本語の談話の構造分析』(くろしお出版 1993)は日本の談話研究の先駆けに。最近、『Language and Food: Verbal and Nonverbal Experiences (言語と食べ物—言語・非言語による体験)』(John Benjamins 2014)を編集、出版した。



## — 日本語に出会うきっかけは？

大学卒業後、コーネル大学のエレン・ア・ジョーデン先生から日本語の集中講座を受けました。先生の社会言語学の観点から日本語を教える姿勢に影響を受けて日本語に興味を持ったんです。先生の授業では、人間関係が一つ一つの発話でどういうふうに積み重なるかを重視していたように思います。相手の言ったことの何に注目して応答するか、観察力の大切さを教えていただけて、日本に来てからとても役に立ちました。それが今の研究(談話分析)にもつながっていると思います。

## — 談話分析とは？

「談話分析」というと文章と会話両方含むことがありますが、私は主に自然な会話を対象に研究しています。私の研究に対して2つの誤解があります。

1つ目は、私の1993年の本を読んだ学生さんが、「私もこれでやってみよう」と言うのですが、実際にはその資料はロールプレイなんです。つまり、「勧誘の会話作ってください。Aさんは勧誘者でこういところで誘って、Bさんは断ってください」というような、作られた談話に基づいているのですが、それは私の研究とはまったく違うんです。

私は、本当に普通にしゃべっている会話を対象にしています。例えば、私の本では、いろんな人に電話の会話を録音してもらい、その中の勧誘を分析したわけです。

また、もう一つの誤解は、私の研究が、「談話のルールは何かを探る」ということではないということです。会話を見ると、発話がつながっていくパターンがありますが、それは自由に使える

ものなんです。ですから文法のようなルールはないと考えています。ルールではなく、そういうやり取りに興味があるんです。

意味は、一人一人の頭の中にあるのではなく、会話しながら一緒に作り上げていくと考えています。社会は公的なものなので、誰かが何かを言ったときに、みんながそれをモニターして、自分の考えも言いながら、お互いに影響を受けて変えていく、そのやりとりの中で意味が作り上げられると思います。1文だけを見て意味はこうかな、と思っても、実際の会話を見ると、意味が反対に思えたりすることもあるわけです。

## — 最近のご研究を教えてください。

最近といっても、10年近くになりますが、「言語と食べ物」に関する研究をしています。試食会での会話や、普通のレストランで食べているときの会話の分析です。

食べ物の会話で何が面白いかということ、五感を使ってその食べ物についていろいろな体験をすることです。例えば試食会ですと「視覚」、まず見て、形や色の話があります。次に匂いを嗅いだりという「嗅覚」から、実際に食べ物を口の中に入れるときの「触覚」そして「味覚」、せんべいなど音がする食べ物の「聴覚」まで、話題になる観点が幾つもあります。日本語に特有のオノマトペ、終助詞、モダリティ表現が、見事にたくさん使われているわけです。

意味論とのつながりもあります。言葉の意味として、「甘い」という言葉は肯定的な意味だと捉えられます(例:「イチゴが甘くておいしい」)。実際の食

べ物の会話で、普通は甘くないものを食べるとします。きつねうどんを口にして「なんか、油揚げが甘い」。そこには、否定的な意味合いが出てきます。そういうふうには、実際のやりとりの中で言葉の意味が変わってくるわけです。

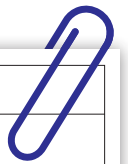
## — 日本人と外国の方との違いは？

試食会では日本人の「と思う」が少ないですが、アメリカ人は「I think」をよく使います。日本語の試食会の場合には、意見の違いがあっても最後にある人がまとめる形で、「シソジュースだと思う」となります。つまり、くくるような形で使われることが多いようです。一方、英語の試食会ですと、最初から数人が「I think」「I think」「I think」と普通に使います。つまり、会話の中の「と思う」と「I think」はどこで使うか、どんな機能を持つかは、言語によって違うわけです。

うどんを日本人、アメリカ人が食べるとします。日本人は、「これ西日本っぽい感じだね。」とかだしの色、濃さや麺のコシなどにこだわります。「これは讃岐うどんかな」「讃岐うどん食べたことないな。違う?やっぱ。」みたいな話になります。アメリカ人が食べると、「この麺が好き」「スープがおいしい」という単なる感想になることが多いようです。そこに食べ物とアイデンティティーとの関係が見えてきます。

## — 食べながら、研究を。

「食感について、こんな言葉使ってるな」とか、いろいろ観察しながらやっています。私自身が結構日本の食べ物が好きなんです(笑)。友達とおいしい物を食べながら、日本語を通して前より五感を使って食生活を楽しんでいます。



## 研究者紹介 006

# 松井真雪

外来研究員・日本学術振興会 特別研究員(PD)

### 教科書に書いてあることが 必ずしも正しくない きっかけはそこだった

まつい まゆき ● 1987年岐阜県出身。東京外国語大学・広島大学大学院でロシア語・言語学・音声学を学ぶ。2015年3月に博士号取得。2015年4月から2年間、国立国語研究所プロジェクトPDフェローを経て、2017年4月より現職。第147回日本言語学会大会発表賞受賞(2014年)。

### — 松井さんの研究を紹介していただけますか？

言語学の基本的な考え方の一つに「対立」があります。

例えば、日本語では、「か」と「が」という言葉では意味の違いが出ます(例:「蚊」と「蛾」)。こんなふうに、意味の違いが生じるような音の区別を言語学では「対立」と呼びます。

私が興味を持っているのは、その対立がどうなっているかということや、特定の状況によって対立が消えたり、弱くなるのは何故かということです。こういった現象の背後にある、話し手の調音のメカニズムと、聞き手の知覚のメカニズムに特に興味を持っています。

扱っている言語は、大学院までは主にロシア語だったのですが、今は日本語や英語にも広がっています。

### — ご研究のきっかけは？

大学生の時にロシア語を勉強したのですが、ロシア語には、「語末に有声音が来た時に、無声化する」というとても有名な発音規則があります。例えば、ロシア語では、草原のことを"луг" /lug/と言います。この語の語末の有声音は、無声化します。その無声化の結果、何が起こるのかといいますと、"лук" /luk/ (ネギ) という別の意味の語と同音異義語になってしまうと言われているのです。ドイツ語やオランダ語にも同様の規則がありますね。簡単に言うと、このように、ある条件下で音の区別が失われてしまうという現象を言語学では「中和」と呼びます。

その「中和」ですが、ロシア語の教科書では、有声音だったものが無声音にパチッとスイッチを切り替えるみた

いに変わってしまうと書かれていることが多いです。しかし実際には、そうではないという研究があることを知り、卒論でその問題に取り組みました。

そのことがきっかけで、実は教科書に書いてあることは必ずしも正しいわけではないといえますか、もう少し自分で調べてみると、教科書に書いてあることとは違う事実が見えてくるというようなことを体験したんです。

### — いまは、国語研に移られてロシア語以外にも取り組んでいますね。

そうですね。1つの言語を見るだけでなく他の言語と対照するという視点は、国語研に来てから開花したと思います。例えば、ロシア語母語話者と英語母語話者の知覚のパターンを比較しているのですが、母語が違うと聞き方に違いがあるということも出てきたり、逆に母語は違うけれども、同じようなパターンを示すということも出てきたりして面白いと感じます。

また最近では、窪菌先生の「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロジェクトの一環として、類型的観点から見た日本語のプロソディー(アクセントとイントネーション)の対立・中和の研究を進めています。前半にお話したロシア語の無声化の問題と、日本語のプロソディーの問題は、一見まったく関係がないように見えるかもしれませんが、両者は根幹にある言語理論のところで、重要なつながりがあるんです。

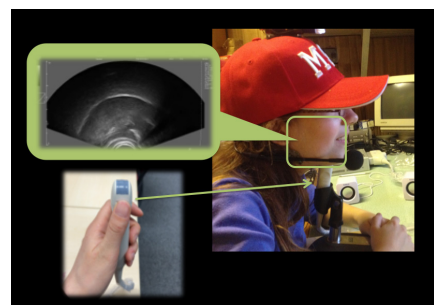
### — 最近面白いと思うことを。

「現代」ロシア語とか「現代」日本語といっても、時間軸に沿った言語の変化も進んでいます。変化の途中である

日突然音が変化するわけではなくて、順番に変化していくと思いますが、その過程がどうなってるかという問題と、私が今までやってきた対立がある環境でなくなってしまうという問題の接点がどうなっているのか。そういうところが面白いと思い、今年の4月から、取り組み始めました。

### — 今後の研究の予定を教えてください。

これから取り組んでみたいことは山ほどありますが、研究者としての駆け出し期にあたるポストドクの私にとって、2大プロジェクトがあります。1つは、調音音声学の装置や方法論を使いながら(前半にお話した)無声化の調音・空気力学的な基盤を解明することです。もう1つは、(後半にお話した)プロソディーの対立と中和を考えることです。そして、より長期的には、音韻対立の背後にある産出・知覚基盤に関する基礎研究を、子どもたちの音韻対立の獲得(発達時の、子どもの話す能力と聞き取る能力の関係やその時間的変化)や、失語症医療(なんらかの後天的な事情で、一個人の内部で話す能力や聞き取る能力が時間的に失われてゆくケース)等の方面に拡張・応用してゆく道を探ってみたいと思っています。



超音波装置で口の中(舌の動き)を可視化する

### テキストにおける語彙的 結束性の計量的研究

山崎誠

和泉書院  
2017年2月



**本**書は、テキスト分析において、特定少数の材料についての経験則からくる直感的説明や、“こういう傾向があ

るのではないか”といった曖昧な分析を排し、コーパスを存分に活用して、計量言語学的なクリアな方法で多角的な分析を試みている。各章においては、懇切に語の採取法やデータ算出法、グラフ・表とその読み取りや、考察結果の明示、解決できなかった点の提示等がなされている。

全篇スリリングだが、特に着目した5点を列挙する。①結束性に比べて計量的な研究が進んでいない「一貫性」について取り上げて、語のランダムな入れ替え、テキストの前半後半を別のテキストから選んで合成する、等の科学的な実験とも言える手法で分析、②通常あまり対象にしないリストタイプのテキストも扱う、

③多義語の、ある語義への文脈中における集中度の測定、④いわゆる「無性格語」や隣接段落間の共起語など諸データや理論や解釈をふまえ、全く新しい角度である“語彙の結束性を基にしたテキストの構成図”を提示、⑤テキストの構成単位としての「意味的段落」を、異なり語数増加率等の客観性が担保できる方法で切り出す、等々である。本書は、コーパスを使用したテキスト分析や語彙研究に新しい方向性を示すのは勿論、例えば国語辞典の語義・用例の示し方の再検討や、「無性格語」の再定義を促す等、日本語の捉え方全体に見直しを迫るだろう。

▶高崎みどり(お茶の水女子大学)

### 所有表現と文法化 —言語類型論から見たヒンディー 語の叙述所有—

今村泰也

ひつじ書房  
2017年2月



**北**インドを中心に話されているヒンディー語(Hindi)は話者人口の数で世界のトップ5に入る大言語である。しかし、日本では認知度が低く(いまだに「ヒンズー語」と間違っ呼ばれる)、文法書や学習書はいずれも初級レベルにとどまっている。本書はこれらの語学書と一線を画す初めての本格的な研究書であり、世界的に見てもレベルの高いものである。

本書の研究対象は“*I have a car.*”、“*She has two brothers.*”のような叙述所有の表現である。文法書では数ページの説明で終わる項目であるが、本書は50以上の言語の例を挙げながらヒンディー

語の6つの所有表現を詳細に考察し、所有をめぐる言語の普遍性と個別性を明らかにしている。また、第6章では所有から義務への文法化について論じている。

本書が理論的枠組みとして依拠しているHeine(1997) *Possession* ではアジアの言語はあまり扱われていない。そのため、本書の記述はアジア(インド)の言語の事例研究としてHeineの研究を補完するものであり、類型論研究や対照研究にも役立つ。

本書は日本のヒンディー語研究の先頭に立つ業績として、次世代の研究者の指針となることは間違いない。

▶ブラシャント・パルデシ(国立国語研究所)

### <アクティブ・ラーニング対応> 日本語を分析するレッスン

野田尚史・野田春美

大修館書店  
2017年4月



**こ**のテキストの特徴は、「問い」を基本に構成されているところにあります。ヒントに導かれながら、まさに「日本語を分析するレッスン」が進んでいきます。発展問題の課題も含めると全15レッスン(章)に実に250問以上。良問がてんこ盛りです。

想定される使い方は、「大学や短大の初年次教育科目や言語関係の基礎科目」におけるグループワークとされています。専門知識がなくても取り組むことができるので、好きなトピックを選んで、小中高の国語科教育に取り入れることもできそうです(偶然、評者はある問題を小学校6年生の教室で扱ったことがあります

が、大いに盛り上がりました)。

設定された問いは、現象を観察する「どうなっている?」「どのような例がある?」というタイプのものだけでなく、「なぜ?」「どうすればいい?」という深いレベルへと展開していきます。多くの学生が既に持っている経験に“謎”を見出し、「うまくことばにするのが難しい」というもどかしさを感じつつも、ワイワイとみんな意見交換しながら“答え”を探していく。そんな教室が思い浮かびます。「しりとりに」から「外国の人の日本語」まで、豊かで不思議な日本語の世界を体感できるテキストです。

▶茂木俊伸(熊本大学)

## 編集後記

今号は「日本語の個性」と銘打たれています。世界の言語のなかで見た場合の日本語の個性、そして、いろいろな個性を持った日本語、という二重の意味が含まれているのかなあ、と思います。まさに国立国語研究所の仕事を端的に言い表すような表現で、実際、今号では現在国語研で行われているプロジェクト（の約半分）の概要が平易な言葉で説明されています。難しそうな名前の研究所ですが、今号を読んでみたら、あ、そんなことやってんの、と、ちょっとわかるかもしれません。お一人でもそんなかたがいらっしゃったら、編集委員としては大変うれしく思います。

ところで、表紙の写真は沖縄県八重山郡竹富町黒島にある「伊古棧橋（いこさんばし）」です。今号の表紙用の写真を探すことになったときには、正直に言うと困りましたが、まさかこんなに『ことばの波止場』の表紙にぴったりの写真を自分が持っているとは思いませんでした。伊古棧橋は、現役の棧橋ではなく、今では国の文化財に登録されています。この写真を撮った時にはまだありませんでしたが、今ではアズマヤもできていて、黒島の貴重な観光資源となっています。沖縄県出身の人でもどこにあるか知らないような黒島ですが、そんな島にも国語研の調査の手は及んでいます。

つい先日も（中の記事で触れた）愛知県一宮市の調査に行ってきました。地元の方と、学生さんたちの方言に対する思いに触れて非常に感動しました。愛知のことばは標準語とそんなに変わらないだろうと思いはなるかもしれませんが、決してそんなことはなく、学生と一緒に興味深い母音の書き取りに熱中しました。日本中どこに行っても「個性的」なことばがあって、人々がそれを使いながら生活しているんだなあと改めて実感した調査でした。（原田走一郎）

## 次号予告

## 日本語の個性②

統語意味解析コーパス研究・  
日本語史研究・  
音声言語研究

## 国語研 ことばの波止場 vol.2

平成29(2017)年9月30日発行

編集 国立国語研究所研究情報誌編集委員会  
発行 国立国語研究所  
〒190-8561  
東京都立川市緑町10-2  
電話042-540-4300(代表)  
協力 くろしお出版  
デザイン 黒岩二三[Fomalhaut]